大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

『婦人世界』の読者相談から読み解く黒髪の変遷

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-04-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 横山, 友子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00002880

人間社会学研究集録14(2018)，53-74（2019年3月刊行）

〈研究ノート〉

『婦人世界』の読者相談から読み解く黒髪の変遷

横山友子[1]

Ⅰ．はじめに

明治後期から昭和初期にかけて日本は近代化を達成し、その過程の中で、女性の職業も大きく変化していった。女性のジェンダー役割と密接に結びついている髪型も、その例外ではない。本稿は、明治末期から昭和初期にかけての日本女性の髪型に対する意識や頭髪の悩みについて、『婦人世界』に寄せられた読者の髪についての相談から分析を行い、読者がどのような悩みを持ち、その悩みがどのように変化していったのかを明らかにする。

『婦人世界』は明治後期から昭和初期にかけて、婦人雑誌を代表する発行部数を売り上げ、多くの読者を獲得した。頭髪に関しても頭皮・頭髪の手入れから流行の髪型など実用的な記事を掲載していた。横山（2018）は、『婦人世界』の記事分析において頭髪に関する価値観や習慣の変遷を追っている。頭髪に関する記事の多くは、流行を作り出した女髪結、美髪師、美容学校の教員によって記載されたものであった（横山　2018）。

横山の研究は、雑誌というメディアを通して専門家たちが髪に関する慣習や価値観について、読者にどのような影響を及ぼしたのかを明らかにした。しかし、読者は一方的に情報を享受しているだけではない。婦人雑誌を舞台として情報が発信されていくプロセスは、あくまでもメディアと読者の相互作用によるものである（木村 2010）。それまでの村単位で生活していた頃は、親から子へ、共同体から個人へと、経験的知識は受け継がれていった。しかし、新中間層は、それまでの方法を失ったかわりに、マスメディア、専門家、『科学』という名の新しい『知恵袋』となる婦人雑誌を得たのである（高橋 1992）。

『婦人世界』には読者問答が設けられており、読者が相談内容を記載した手

[1]大阪府立大学人間社会学研究科博士後期課程

紙を編集部に送り、それぞれの専門家が回答している。読者欄は一般の人々がマスメディアについての価値観や感想を表明した数少ない記録の一つである（木村 2010）。読者欄は基本的に編集者のコントロール下にあるものであり、そこにどのような投稿が掲載されるかについては、送り手によるバイアスが加えられていることが推測されるため、読者の姿を読み取るための資料としては限界がある（木村 2010）。しかしそこには、メディアからの一方的なメッセージでもなく単なる受け手の状況でもない、メディアと受け手の相互作用が映し出されているという点で、メディアと読者が取り結んだ関係を考察するためには積極的な意味をもつ資料であるといえる（木村 2010）。

雑誌に投書する人びとは少数で有り、採択されて紙面に載るのはさらに少数である（見田 1980）。しかし、一つ一つの質問について、同じような質問・疑問を抱いている読者は少なくないはずである。自己あるいは周囲の誰それの直面している、程度の差はあれ同じような状況と意識的・無意識的に重ね合わせて読んでいる読者も多い（見田 1980）。このことから多くの読者を抱えていた『婦人世界』の読者相談は、実際に、その記事を読む読者が頭髪についてどのように悩み、頭髪をどのように扱い、いかなる価値観を持ち、どのような審美観を持っていたのかを解明する貴重な資料であると言える。本稿では第 1 巻から第 28 巻にかけての『婦人世界』に寄せられた髪に関する読者相談を分析することで、記事分析からは見えなかった当時の読者の髪にまつわる悩みの実態について明らかにする。

第 2 章では、『婦人世界』がいかなる雑誌であったのかを示したうえで、『婦人世界』に寄せられた読者相談に掲載された、「髪」に関するキーワードが含まれる相談内容の分析の方法について述べる。第 3 章では、『婦人世界』が発刊され、髪に関する読者相談が記載された時期を 3 期に区切ったうえで、それぞれの時期に、女性の髪に関していかなる相談があり、そこから何が読み取れるのかを示す。第 4 章では、結論として、この時期の女性の髪にかかわる身体感覚も変化させていったことを確認する。

Ⅱ．婦人世界の分析

１．『婦人世界』婦人雑誌の位置づけ

『婦人世界』は婦人向けの総合雑誌として、1906（明治 39）年 1 月に創刊された。月刊誌として発行され、1933（昭和 8）年 5 月まで全 354 冊が刊行された。明治後期の『婦人世界』の広告文面に「本誌は全国女学校の教育方針に依りて編輯す」と、明確に女学校文化圏への立脚がうたわれ、職業婦人・女学生や都市中産家庭の主婦層を中心に普及した婦人雑誌購買層に沿っていた（永嶺 1997）。出版後、まもなくそれまでの代表的な婦人雑誌『女学世界』をぬいて、「婦人雑誌といえば『婦人世界』と同義語といわれるほど、売り上げた。当時、売れたといっても、7、8 千部から 1 万部の時代に、『婦人世界』は 30 万部の発行部数をほこっていた」（山崎 1959）。このことから、『婦人世界』は当時の中産階級の広い範囲に対して影響を与えたと考えられる。また、その後の婦人雑誌の原型ともなったといわれており、附録をつけるなど、斬新な商法で売り上げを伸ばした。

『婦人世界』は、一貫して家庭の主婦を中心に、若い女性達を対象とするものであった。近代社会の求めた家庭婦人像を、揺れをみせながら提供した重要なメディアである。しかも文芸的・教養的な部分を残しながら、日常の家庭生活に密着した婦人雑誌としての特色を長期にわたって維持した。それは読者のニーズを捉えた内容であったからであろう。

『婦人世界』は実際的な生活の知識の提供を行い、読者を引き付けた。それまでの婦人雑誌が、文学的教養的色彩をつよく帯びていたのに対して、日常生活の実用記事を多量に入れたことは、その後の婦人雑誌に大きな影響を与え、婦人雑誌の型を変えさせ、日本的な婦人雑誌を生む契機をつくったという評価もできる。

常に広い読者層を捉えて編集されていた『婦人世界』は、この時期のあたり前の家庭婦人、一般的な女性が何を求めていたのかを相談内容から髪の価値観の変化を追うことができるのである。[2]

---

[2]　明治 30 年代、小学校教員の初任給が 10 円ほどであったのに対し、婦人雑誌は 15 銭であった（週刊朝日編 1988）。また、15 銭とは、当時、銀座の高級パーラーで食べるアイスクリームと同じ価格であった（週刊朝日編 1988）。この価格を鑑みると、誰でも気楽に手

２．記事分析方法

本稿が分析対象とするのは、第 1 巻から第 28 巻（1906〈明治 39〉年〜1933〈昭和 8〉年）における頭髪に関する記事である。研究方法は以下の手順に従った。

（1）婦人世界に掲載されている頭髪に関する読者からの質問と、その質問に対する回答を読者相談より全て抽出した。

（2）抽出した内容を「頭皮・頭髪に関する疾患」「髪の手入」「髪質」「髪型」「髪の装飾」にカテゴリー分類した[3]。

（3）分類した記事から、『婦人世界』の読者が女性の髪に対して、どのように悩み、回答され、それがどのように変化していったのか、その背景を探った。

なお本稿ではこれらの記事を、第 1 期を 1906（明治 39）年から 1915（大正 4）年、第 2 期を 1916（大正 5）年から 1925（大正 14）年、第 3 期を 1926（大正 15）年から 1933（昭和 8）年の 3 期に分けて分析している。髪型の変遷に関して、どのような時代区分を用いるのかについては、その変化の背景となる社会的な出来事と、分析の対象とする雑誌の継続期間および記事数の両方を考慮に入れる必要があるだろう。上記の区切りにしたのは、雑誌の記事数からいえば、この区切りによって各時期に分析に耐えうる数の記事を配置できるためである。また社会的な出来事に関しては、社会・経済状況に大きな変化をもたらした第一次世界大戦が 1914（大正 3）年から 1918（大正 7）年、関東大震災が 1923（大正 12）年、また大正デモクラシーの全盛期が 1910 年代から 1920 年代にかけてであり、女性の髪型に大きな影響を及ぼすような社会変化が第 2 期に集中する形となり、女性の髪についての記事内容の変化をより明確に提示できると考え

に取れた雑誌であったとは言い難く、マスメディアに接触しえないであろう貧困層は読者相談にはあらわれない。加えて、記事が読めず、投書の書けない乳幼児も同様に読者相談にはあらわれない（見田 1980）。

[3] 抽出した質問内容の中に、「フケ」、「抜け毛」、「薄毛」、「禿」、「切れ毛」、「頭部の痒み」「虱」、「毛根炎」、「頭部の瘤」、「多毛・濃い毛」、「シラクモ」などの語があり、頭皮・頭髪の悩みが語られていれば、その質問に「頭皮・頭髪に関する疾患」というカテゴリーに入れた。同様に、「髪染め」、「髪油」、「洗髪」、「毛生え薬」、「毛髪の養生」、「頭部の臭い」、「枝毛の処理」などの語がある質問には「髪の手入れ」というカテゴリーに入れ、「髪色」、「白髪」、「癖毛」、「髪の硬さ」などの語がある質問には「髪質」というカテゴリーに、「髪型」、「鏝」、「パーマ・ウェーブ」などの語がある質問には「髪型」というカテゴリーに入れた。最後に、「鬘」、「髢」という語がある質問に「髪飾り」というカテゴリーに入れた。

たからである。

なお、頭髪について取り扱う相談コーナーの名称は変化しており、創刊時の明治期は「衛生問答」であったが、8 巻 1 号（1913〈大正 2〉年）より「美容問答」、大正 12 年より「婦人美装相談所」、大正 12 年 6 号より「婦人美容相談所」、大正 13 年より「お化粧相談」、昭和 4 年 24 巻 4 号より「美容流行相談」、昭和 5 年 25 巻 12 号より「美容相談」へと変化していった。

Ⅲ．『婦人世界』の読者相談からみる女性の黒髪に対する変遷

１．『婦人世界』に掲載された読者相談内容の概要

頭髪に関する質問は、28 年間で 191 件あった。質問内容について、読者層、相談内容について、分析していく。

(1) 読者層

相談内容が掲載され、属性が明記されている投稿者の属性分布について示した。

表１　頭髪に関する相談投稿者の年齢

年齢	人数（人）
10 代	10
20 代	22
30 代	5
40 代	1
50 代	1
不明	152
合計	191

表２　頭髪に関する相談投稿者の性別

性別	人数（人）
女	46
男	0
不明	145
合計	191

表３　頭髪に関する相談投稿者の所在地

地域別	人数（人）
北海道	3
東北	7
関東	13
中部	11
近畿	12
四国	2
中国	5
九州・沖縄	5
ハバロウスク	1
不明	132
合計	191

1）年齢層

質問投稿者の年齢は記載されていないものが多い。記載されているものに関しては、10 代から 20 代の投稿が中心であり、20 代の投稿が最も多くみられた。

2）性別

質問投稿者の性別は記載されていないものもある。記載されているものに関しては、女性のみであり、髪に関する質問で男性らしき投稿者と明文化されたものは見受けられない。

3）読者の所在地

投稿をした読者が明らかにしている所在地は、多岐にわたり、都市部のみで購読されていたものではなく、全国的に広く読まれていたことが分かる。また、「當地（露領ハバロウスク）にては寒氣のため頭髪油一切凍りかたまりて用をなさず、斯かる憂なき油なきものなりや。」[4]、「當地は極寒地にて、凍らぬと聞く椿油さへも白く固まれり。その積りにて御教示を乞ふ。」[5]というように国内のみにとどまらず、海外から地域特有の悩みが寄せられている。そして、「東京の妹よりブリアンチンなるものを貰ひ、こわい毛につけたところ、幾らか軟かになれり。猶續けて用ひて見たしと思へど田舎にては不便なり。且つ高價なるも

---

[4] 『婦人世界』第 8 巻 11 号 p. 119　1913（大正 2）年
[5] 『婦人世界』第 9 巻 1 号 p. 124　1914（大正 3）年

のと聞く。田舎にてできる類似品なきか。」[6]という、都市部では手に入らないものを、地方ではどのように代替えをしたら良いか、などの質問も多くあった。

(2)『婦人世界』に掲載された黒髪に関する相談内容

投稿された質問を数量的に整理するにあたって、相談内容のテーマを割り当てると、275 件であった。それらをカテゴリー分けし、大カテゴリーとして、「頭皮・頭髪に関する疾患」「髪の手入」「髪質」「髪型」「髪の装飾」「推奨される美容院」「道具の手入れ」の 7 つに分類した。このうち「推奨される美容院」は 1 件、「道具の手入れ」も 1 件とそれぞれ件数が少なかったので、以下では「推奨される美容院」および「道具の手入れ」を除く 5 つのカテゴリーを主要カテゴリーとして、分析の対象とした。これら各主要カテゴリーの相談件数を図 1 に円グラフ化した。

1 件の相談内容に、複数のテーマが存在することもあるため、相談件数とカテゴリーごとに分類したテーマ数は同数ではない。

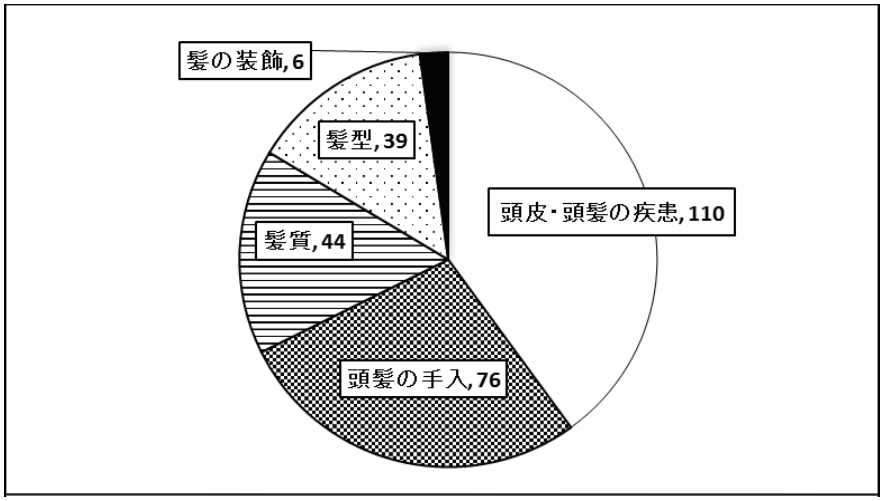

図 1　『婦人世界』頭髪に関する読者相談内容（主要カテゴリー）

[6] 『婦人世界』8 巻 5 号 p.136　1913（大正 2）年

『婦人世界』の誌面に掲載された頭髪に関する相談内容は実に多様であったが、相談コーナーのページ数は限られており、質問は単刀直入であり、用件のみを記載したものが多かった。また、読者の属性分布からも分かるように、投稿された質問に読者の背景が詳細には記載されていないことも特徴である。加えて、回答者は医師もしくは理美容の専門家であり、回答は短く、端的に当時の医学的処方が記載されていることが多かった。相談件数は年々減少していくが、大きな増減はなく、分析した期間を通して常に投書され、掲載されていたことがわかる。5 つの主要カテゴリーを、創刊時 1906（明治 39）年から 1933（昭和 8）年までを 10 年ごとに分け、数量的変化をグラフ化したものが図 2 である。

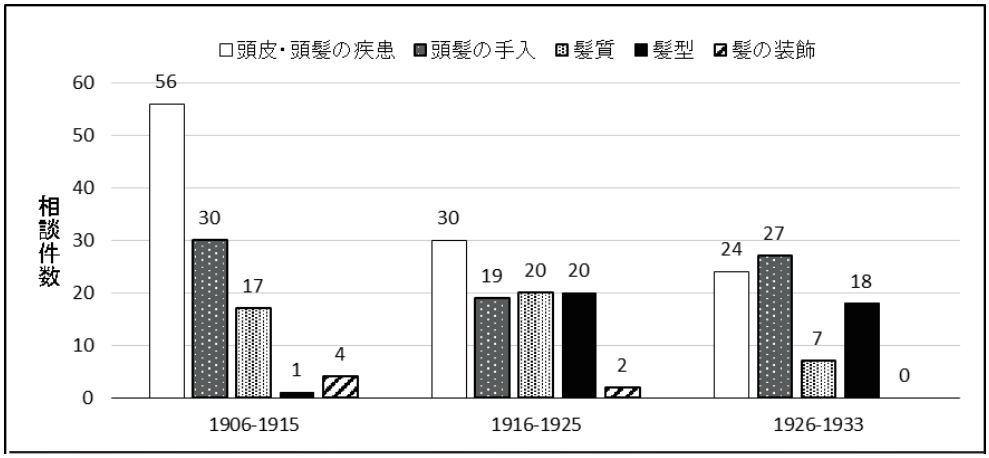

図２　『婦人世界』頭髪に関する読者相談件数の変化（主要カテゴリーのみ）

第 1 期（1906〈明治 39〉年から 1915〈大正 4〉年）までは、頭髪に関する相談件数は 108 であったが、第 2 期（1916〈大正 5〉年から 1925〈大正 14〉年）は 91、第 3 期（1926〈大正 15〉年から 1933〈昭和 8〉年）には 76 に緩やかに減少した。

大カテゴリーでいえば、「頭皮・頭髪に関する疾患」が最も多く、110 件であった。第 1 期では 5 つのカテゴリーのなかで最も多い 56 件の相談内容であったが、徐々に減少し、第 3 期には当初の半分ほどの 24 件にまで減少した。2 番目に多かった「頭髪の手入れ」は、76 件の質問があった。第 1 期の 30 件から、第 2 期は 19 件に減少したが、第 3 期には 27 件と相談内容のなかで最も多いカテゴリーであった。次に、「髪質」について、44 件の質問が寄せられており、第 1 期

は 17 件、第 2 期は 20 件と寄せられていたが、第 3 期には 7 件にまで低下していった。それに代わって、「髪型」は 39 件の質問が寄せられており、第 1 期は 1 件のみであったが、第 2 期 20 件、第 3 期 18 件と第 1 期から大幅に増加した。最後に「髪の装飾」については、6 件の質問が寄せられており、第 1 期こそ 4 件あったものの、2 期には 2 件のみとなり、第 3 期にはなくなった。

もっとも件数の多かった「頭皮・頭髪に関する疾患」に関する相談内容を小カテゴリー化し、数量的変化を図 3 にグラフ化した。

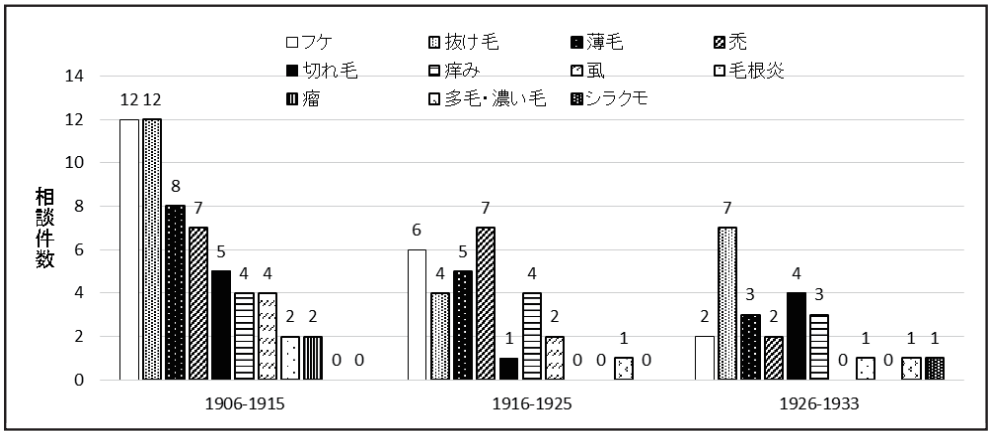

図３　『婦人世界』「頭皮・頭髪の疾患」に関する相談件数の変化

第 1 期は、「頭皮・頭髪に関する疾患」に関する相談件数のなかで、「フケ」「抜け毛」に関する悩みが最も多く、次いで「薄毛」「禿」「切れ毛」「頭部の痒み」「虱」「毛根炎」「頭部の瘤」「多毛・濃い毛」「シラクモ」に関する質問の順であった。第 2 期には、「フケ」に関する相談が最も多いものの、件数は半分の 6 件にまで減少し、「抜け毛」「薄毛」「禿」「痒み」と大差がなく、「虱」については 2 件に低下し、「毛根炎」「瘤」についての相談はなかった。しかし、今度は「多毛・濃い毛」についての質問が現れた。第 3 期には、「頭皮・頭髪の疾患」に関する相談件数が第 1 期と比較し、大幅に減少した。さらに「フケ」「禿」に関する質問は 2 件までに減少し、「抜け毛」に対する内容が最も多くなった。「虱」に関する質問はなかったが、「シラクモ」に関する質問が 1 件、掲載されていた。

次に、「髪の手入れ」に関する相談内容を小カテゴリー化し、その数量的変化を図 4 にグラフ化した。刊行当初、「髪の手入れ」に関する相談件数のなかで、

「髪染め」に関する悩みが最も多く、次いで「髪油」「洗髪」「毛生え薬」「毛髪の養生」に関する相談であった。第 2 期には、「洗髪」と「毛髪の養生」に関する相談がそれぞれ 5 件と最も多くなり、次いで「毛生え薬」が 4 件、「髪染め」が 3 件、「髪油」に関しては 1 件のみであった。また、「頭部の臭い」に関する相談が掲載された。第 3 期には、「髪油」は 1 件のままであったが、「毛髪の養生」が 8 件に増加し、「髪染め」と「洗髪」が 5 件であった。「毛生え薬」が 3 件、「頭部の臭い」が 2 件、さらに「枝毛の処理」についての質問が新たに 3 件掲載された。

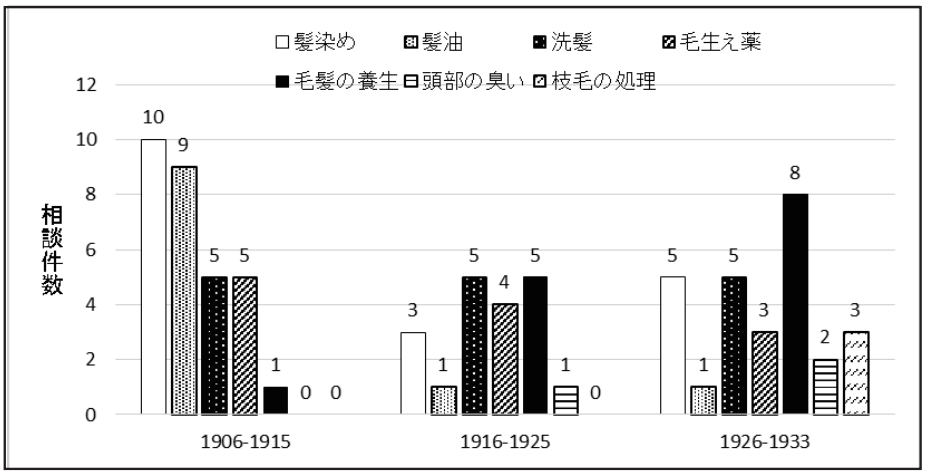

図４　『婦人世界』「頭髪の手入れ」に関する相談件数の変化

続いて、「髪質」に関する相談内容を小カテゴリー化し、その数量的変化を図 5 にグラフ化した。第 1 期では、「髪色」に関する相談が 8 件と多く、次いで「白髪」が 5 件、「癖毛」が 4 件と続いた。「髪質」のなかで、「髪色」に関する質問は 3 期を通じて多い相談内容であった。「白髪」については、第 1 期は 5 件、第 2 期は 7 件に増加したが、第 3 期には 1 件のみであった。同様に、「癖毛」も第 1 期は 4 件、第 2 期は 5 件に増加したが、第 3 期には 1 件のみであった。「髪の硬さ」を相談したものは、2 期の 1 件のみであった。

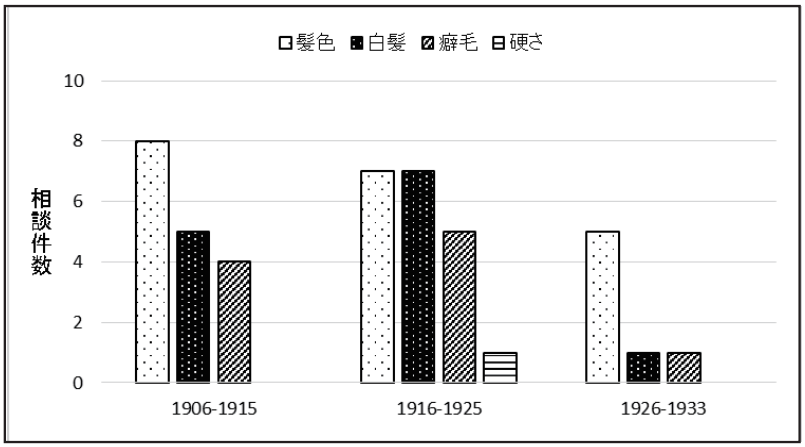

図５　『婦人雑誌』「髪質」に関する相談件数の変化

そして、「髪型」に関する相談内容を小カテゴリー化し、その数量的変化を図6にグラフ化した。第1期では、「鏝」に関する質問が1件のみであった。第2期には、「髪型」に関する質問が16件と増加し、「鏝」に関する質問も4件と増加した。第3期には、「髪型」に関する質問が9件に減少したが、「鏝」に関する質問は4件と変化がなかった。しかし、「パーマ・ウェーヴ」に関する質問が新たに出現し、5件あった。

図６　『婦人世界』「髪型」に関する相談件数の変化

最後に、「髪飾り」については、第1期に鬘についての質問が1件、髢についての質問が3件あり、第2期には髢について2件のみがあったが、第3期には、髪飾りについての質問がなかった。

これらのデータをもとに、女性の頭髪に関する相談がどのようなものであったか、その内容は時代によってどのように変化していったのかを、記述された相談内容を数量化し、具体的に背景を含めて述べていきたい。1906（明治 39）年から1915（大正4）年の第1期の特徴は、「頭皮・頭髪の疾患」が他の相談と比較して2倍近くの件数があり、最も多かった。1916（大正5）年から1925（大正14）年の第2期は、日本髪から洋髪への変換期であり、第1期には1件であった「髪型」に関する相談が大幅に増加したことが特徴である。1926（大正15）年から 1933（昭和 8）年の第 3 期の特徴は、経済成長とともに洋髪が受け入れられ、日常生活が大きく変化していったにもかかわらず、「頭皮・頭髪の疾患」の悩みは止むことなく続いていたことがみられる。以上の時期ごとに、さらに詳しく分析を行っていきたい。

２．第１期　明治後期から大正初期－衛生の啓蒙の必要性（1906〈明治 39〉年から 1915〈大正 4〉年）

明治政府が公衆衛生を推し進めた背景には、開国をしたことにより、コレラをはじめとするさまざまな伝染病が流行り多くの庶民が罹患し人口減少にまで影響を及ぼしたこと、欧米諸国との差を無くすために文明国としての世界的認知を図ったこと、そして積極的に富国強兵に取り組んだことがあげられる。女性の身体は出産・育児を通して国家の再生産にかかわるように馴致された（中嶌 1990）。荻野吟子のほか、岡田美寿子などの医療関係者や「名士夫人」などが含また有識者階級の女性たちが主体的に私立婦人衛生会を結成しし、積極的に衛生の啓蒙活動を行った。衛生の啓蒙活動は、公衆衛生から徐々に個々の衛生への転換し、女性の髪型にも目が向けられた。鹿鳴館開館などの西洋文化を模した上流階級の洋装化の影響もあり、1885（明治 18）年、医師の渡辺鼎と経済記者の石川暎作が「婦人束髪会」を発足し、従来の日本髪が不衛生、不経済、不便であることを指摘し、大きな害があるとし、それに代わり、衛生、経済、便益の三つを兼ね備えた束髪を提唱した（平松 2012）。

しかし長きに及んだ日本髪の風習から、一足飛びに西欧スタイルに切り替え

ることは不可能であった（橋本 1998）。また、鹿鳴館の舞踏会や夜会に出るような洋装をおこなう上流階級の婦人や学生など一部をのぞき、髷を結うための長い黒髪は封建時代を通じて女の美しさを象徴するものとされた（岡 1981）。そのため、黒髪による日本髪の価値観は大きな変化がもたらされることなく、根強く残った。

この期間の『婦人世界』における頭髪関連の相談は 108 件であった。テーマは、「頭皮・頭髪の疾患」についての相談が 56 件、「頭髪の手入れ」が 30 件、「髪質」が 17 件、「髪型」が 1 件、「髪の装飾」が 4 件であった。相談の内容は、頭皮・頭髪の疾患に関するものが最も多く、次いで髪の手入れに関する相談であった。

次に、テーマごとに、その内容をみていく。「頭皮・頭髪の疾患」については、フケ、抜毛に関するものが多く、次いで薄毛、禿、切れ毛、痒み、虱、毛根炎、瘤であった。フケに関しての相談内容は、「頭髪粗く、またフケ多し、良い薬はありませんか。」[7]と治療法を聞いているものが多い。この質問に対し、医学士の天本は、「度度ある質問です。よく加里石鹸で頭を洗ひ、ヒマシ油　五、〇　酒精　二五、〇の混和液を、毎夕おつけなさい。またこれに香水をまぜれば、なほよし。」[8]と答えている。天本が、度々この質問があると述べている通り、当時はフケに対する悩みが一般的であったことが考えられる。また、「毛が抜けて困る。フケができて困る。毛が切れて困る。頭が痒くて困る。これを治療するによき方法なきか。」[9]と、フケだけでなく、抜け毛、切れ毛、痒みも含めて頭皮・頭髪に多くの問題を抱えていることが分かる。この質問に対し、回答者の東京美容院長の北原は「同じ問が澤山参りました。」[10]と同様の相談が多いことを前置きしている。フケに関する相談は 12 件掲載されており、回答者によってフケの原因は皮脂漏などと指摘され、ほとんどに頭皮・頭髪の洗浄方法、洗浄剤、塗布する薬液の調合など医学的な視点から回答されている。

なぜこの時期、「頭皮・頭髪の疾患」についての相談がこれほど多かったのだろうか。当時は、都市ガスもごく一部の地域のみに限られており、ようやくラ

---

[7] 『婦人世界』第 6 巻 6 号 p. 141　1911（明治 44）年
[8] 『婦人世界』第 6 巻 6 号 p. 141　1911（明治 44）年
[9] 『婦人世界』第 8 巻 7 号 p. 137　1913（大正 2）年
[10] 『婦人世界』第 8 巻 7 号 p. 137　1913（大正 2）年

ンプに代わって電灯が普及した頃であった。1914（大正 3）年の記事では、「風呂は室内外で火を焚く。都会では水道が整備されつつある。」[11]というインフラストラクチャーの状況では、風呂に入るだけならばまだしも、長い髪を洗うには、かなり不便であったと考えられる。これは、虱の対応についても、同様で、頻繁に洗髪ができない状況に苦慮していたものと思われる。抜け毛や禿についての相談は、「近年甚しく抜毛して薄くなれり、醫者は精神的の抜毛なりといふ、かかることあるものなりや」[12]「子供の時、髪の生際を火傷し、素人のいふままに鮑の粉をすりつけたるに痕となりて禿を生じ、いろいろ手當せしも効なし。醫師に聞けば植皮術を行へばよしといはる。如何なるものなりや。」[13]というように、医師に相談するも解決せず、悩んでいる相談者がいた。また、「チブスを患ひ、頭丸坊主となり、赤味を帯ぶ。赤くなりては毛が生えぬものなりや。」[14]と、疫病を患い、その後、禿に悩む相談も寄せられている。明治以降、西洋医学が一般社会に入り、身体の問題は医者が関わるようになった（養老 1996）。明治の半ばから日清・日露戦争に至るこの時期は、国家統一と軍事力強化のために帝国医療が実施され、明治 30 年に施行された「伝染病予防法」により衛生をめぐる議論や実践は大きく展開していったが、国民の中には、未だ伝染病の後遺症に悩むものもいたことが質問からも垣間見える。

「髪の手入れ」では、「頭は月に何度洗ふのが適當か。また、何で洗ふのが宜しきか。目下椿の絞り滓にて洗ひをれり、如何。」[15]と洗髪の頻度、洗髪剤について、度々相談されている。この期間、洗髪の頻度に関しては、記事でも「半年も髪を洗はないとか、一年も髪を洗はないとかいふひとがよくある」[16]と記載されている。そのためか、回答者の北原は「頭の地の汚れ易いお方は、月に三回以上頭の地をなるべく香のない石鹸でお洗ひなさい。そして、毛の汚れ易いお方は、これ迄の習慣のやうにうどん粉やふのりの類で洗ふのが一番宜しうございます。私の經驗からいへば、毛は石鹸で屢ばお洗ひになる方は、切れ毛が

---

[11] 『婦人世界』第 9 巻 7 号 p. 47　1914（大正 3）年
[12] 『婦人世界』第 9 巻 1 号 p. 124　1914（大正 3）年
[13] 『婦人世界』第 8 巻 10 号 p. 117　1913（大正 2）年
[14] 『婦人世界』第 9 巻 14 号 p. 126　1914（大正 3）年
[15] 『婦人世界』第 8 巻 2 号 p. 134　1913（大正 2）年
[16] 『婦人世界』第 7 巻 12 号 p. 138　1912（大正元）年

できますから」[17]と、明治期に比較すると洗髪頻度は上昇しているものの、決して多くはなく、従来通りの麩海苔、饂飩粉で洗浄することを推奨している。当時、石鹸はすでに洗髪に利用されていたが、髪の性質に合わせた弱酸性のものや、石鹸のアルカリ性を補うようなリンスやコンディショナーのようなものはなかった。そのため、洗浄力があっても、髪が傷み、赤茶け、うねりが出てしまうことを恐れ、石鹸の使用は推奨されていなかった（横山 2018）。しかし、簡易に髪を洗うことのできない洗浄剤の使用は、頭皮・頭髪の疾患を解消できずに、多くの読者が悩み続けることになった一つの原因ともなっていたのではないだろうか。

当時、婦人雑誌は、利便性や衛生面、経済面よりも黒髪の美しさを重視し、美しいと称えられる口絵を多く取り入れ、様々な日本髪を女髪結が推奨し続ける情報を発信し続けた（横山 2018）。「身体をどう見るか」という身体の規定は、その社会が「人間をどのように考えているか」、それを明確に示す（養老 1996）。アラン・コルバン（2010）が、女性の身体の歴史は支配の歴史でもあり、長い間、つねに「慎み深く」、監視された処女のような美しさにたいする要求が伝統的に強かった、と述べているように、長きにわたる日本髪の伝統は、集団的規範によって形成され、社会によって要請される態度の表れであったと言えるだろう。しかし、いつまでも長い黒髪を頻繁に洗うことのできない日本髪や廂髪にしておくことで、「頭皮・頭髪の疾患」が髪に関する相談では最も多い原因となってしまっていたことが相談内容から推察される。

３．第２期　大正期－個人衛生から髪型の審美性へ（1916〈大正 5〉年から 1925〈大正 14〉年）

大正期には公衆衛生思想の普及が図られ、国をはじめとする各行政機関、保健・医療機関による公衆衛生事業の展開等々が徹底し始めた。個人衛生の定着は、衛生がより微細に日常生活領域に浸透する契機となり、美意識やセクシャリティの領域にも衛生的な基準が持ち込まれていた（宝月 2010）。個人衛生の定着は、「頭皮・頭髪の疾患」の相談件数を減少させた大きな要因のひとつではないかと思われる。

---

[17] 『婦人世界』第 8 巻 2 号 p. 134　1913（大正 2）年

『婦人世界』における頭髪に関する相談件数は、91 件であった。テーマは、「頭皮・頭髪の疾患」が 30 件、「頭髪の手入れ」が 19 件、「髪質」が 20 件、「髪型」が 20 件、「髪の装飾」についての相談は 2 件であった。この時期は第 1 期と比べ、「頭皮・頭髪の疾患」や「頭髪の手入」が減少し、「髪型」に関する相談が大幅に増加した。

テーマごとにみていくと、「頭皮・頭髪の疾患」においては、フケに関する相談が 6 件に減り、抜け毛、薄毛、禿、痒みと差異が少なくなった。また、虱については、2 件に減少した。この変化は、衛生が個人の身体において具体化されてきたことが考えられる。相談内容にも多くみられるようになった束髪や洋髪などに髪型が変化していったことも影響していると考えられる。記事の中にも、「近頃は若い方の間に束髪が流行します。殊に、女學校へおいでになる方は、大抵束髪にしていらつしやいます。」[18]と記載されており、束髪が若い女性の間で一般化されてきていたことがわかる。ただし、「私は、三十八歳の女　が、七八年前に頭の中央直徑一寸ぐらゐ禿ました。常に痒くてしかたがありません。」[19]「チフスに罹り毛が生えてきません。毛が生える方法を。」[20]など、第一期同様、依然として頭髪の疾患について悩みが投書されており、束髪や洋髪の流行が頭髪の悩みを一掃したわけではないことがわかる。

しかし、この時期に増加した「髪型」では、鏝の使用方法や、ウェーブの当て方についての質問も多く、「ヘヤアイロンの使ひ方をお教へ下さい。」[21]など、流行を追い、苦慮している相談が寄せられている。また、「私は廿一歳の人の妻ですが髪を結ふことが下手で近頃流行の七三の束髪を結ふことが出來なくて困つて居ますから恰好の良いのを教えて下さい。」[22]など新たな髪型へと移行したことによって、定型的な日本髪から、束髪、洋髪など髪型の選択肢が増え、新たな悩みが出現したことがわかる。

第 2 期には、経済の発展により、新中間層が出現し、増加していった時期である。その中でも、資本主義発展につれてさまざまな職業が女性に門戸を開き、職業婦人が増加した（村上 1983）。また、核家族化のなかで、「主婦」という役

---

18 『婦人世界』第 12 巻 2 号 p. 107　1917（大正 6）年
19 『婦人世界』第 18 巻 8 号 p. 89　1923（大正 12）年
20 『婦人世界』第 19 巻 12 号 p. 278　1924（大正 13）年
21 『婦人世界』第 18 巻 6 号 p. 216　1923（大正 12）年
22 『婦人世界』第 18 巻 7 号 p. 41　1923（大正 12）年

割が新たに誕生した（木村 2010）。ただし、髪型の変化は、活動量、行動範囲の拡大による利便性や流行によってだけでなかった。疾患を防ぎ、衛生を個々に維持するためという動機も、新たな髪型への移行を促した大きな理由だったと考えられる。そこには、長い黒髪からもたらされる審美性やジェンダーや、年齢層や、社会的地位を表し、要請される身体への規制から、新しい髪型の利便性・清潔さを得るものの、定型的な髪型から洋髪にすることでの選択肢がさらに頭髪について悩みを生み出していることに悩み、投稿する読者がいたのだった。

４．第 3 期　昭和初期―個性美と伝統（1926〈大正 15〉年から 1933〈昭和 8〉年）

1923（大正 12）年に起こった関東大震災、昭和金融恐慌によって日本経済は弱体化したうえに、1929（昭和 4）年に世界恐慌の波にさらされた。1931（昭和 6）年の満州事変を契機に、日本軍は大陸へと進出し、国内はファシズムの傾向が強くなっていく。しかし、そのような政治的動きを感知しないかのように、モダンガールが女性の風俗として注目を浴び、映画の最盛期を迎え、ハリウッドの影響を強く受けるようになる（石田 2016）。欧米の影響を受けて、日本女性のファッションは「和」から「洋」へと変化していった。洋装の女性が増えると、断髪をする女性が現れた。彼女たちは、「身だしなみ」や「共同体主義的」な作りだされた伝統ではなく、「個性美」という自由な自己表現をおこなった。

『婦人世界』における頭髪に関する相談件数は 76 件であった。「頭皮・頭髪の疾患」は 24 件、「頭髪の手入れ」は 27 件と「頭皮・頭髪の疾患」を上回った。「髪質」は 7 件、「髪型」は 18 件であった。第 3 期は、今まで最も多かった「頭皮・頭髪の疾患」が、さらに減少し、「髪型」に関する相談件数が 3 番目に多いものとなった。

テーマごとにみていくと、「頭皮・頭髪の疾患」においては、フケに関する相談は 2 件と大きく減少し、抜け毛については 7 件と増加した。そのほかに、薄毛は 3 件、禿は 2 件、切れ毛は 4 件、痒みは 3 件、毛根炎、多毛・濃い毛、シラクモがそれぞれ 1 件であった。虱についての相談は消失した。フケについては、「私は冬でもフケが多く、又痒くて困ります。療法をお教へ下さい。」[23]「二

[23] 『婦人世界』第 23 巻 4 号 p. 174-175　1928（昭和 3）年

三年前よりフケ多く、脱毛甚だしく、誠に困つて居ります。性来健康にて醫師のお世話になつたこともなく、不潔にもして置かぬのにどういふのでせう。」[24]と、第 1 期から変わらない内容で悩んでいる読者がいた。また、回答者は銀座美容院の早見君子に代わっているが、「フケが多過ぎたら、脱毛の警鐘と思へ、とさへ申します。貴女のはたぶん脂漏性脱毛だと思ひます。早いうちの小さい部分でしたら、藥をすりこむとよくなりますが、二三年も前に起つたのでしたら専門醫の治療をうけなさい。白毛がまぢるのは毛根が榮養不良になつてゐるせいです。なまなかな素人考へより早く醫師におかゝりなさい。」と、回答内容も受診や、医学的処方となっており、大きく変化はしていない。

ただし、フケに関しての質問は大きく減少しており、読者の中での重要性や、同じような悩みを持つ人も減少していたのではないだろうか。これは、本編の記事でも触れられているように、1923（大正 12）年に起こった関東大震災以後、日本髪よりも束髪や断髪などの洋髪がより取り入れられ、手入れがしやすくなったことも大きな要因ではないかと考えられる。記事の中でも、洗髪間隔が庶民の中でも短くなり、「近頃は関西でも髪を洗ふことが盛んになつて、四十年も五十年も髪を洗つたことのない人までが、月に一度ぐらゐは必ず洗ふやうになりました。」[25]と地方でも少しずつ清潔習慣の変化が起こってきていることが記載されている。また、洗髪に用いられていた洗浄剤も麩海苔や饂飩粉から、石鹸やシャンプーパウダーへと変化し、洗浄剤の品質についても改善されていったことは、衛生面を改善し、頭皮・頭髪の疾患を予防することが出来た背景に含まれる。これは、女性の就職者数が増加した（村上 1983）ことによって日々の活動量が増加したことで、洗髪の必要性が出てきたことも大きく関係していたと考える。

次に多く増加した「髪型」についての相談は、「私は大變丸い顔なのです。それでいま洋髪にでも結つて見たいと思ひますが、丸い顔には洋髪が似合ふでせうか。それとも日本髪の方がよいでせうか。」[26]というように、自分に合う髪型はどのようなものか問う相談が 9 件あった。また、回答者の早見氏は「洋髪で

---

24 『婦人世界』第 25 巻 3 号 p. 346　1930（昭和 5）年
25 『婦人世界』第 12 巻 9 号 p. 24　1914（大正 3）年
26 『婦人世界』第 24 巻 5 号 p. 340　1929（昭和 4）年

も日本髪でも、結ひ方によつて似合ひます。」[27]と回答している。質問者の属性が明記されていないため、年齢や職業などは分からない。しかし、これらの投稿者は日本髪か洋髪にするかの選択の自由を前提として相談している。この時期の女性たちが自分の似合う髪型に結うことが出来るようになったことは、大きな変化であり、回答者もこの選択肢を受け入れ、個々に合う髪型を選択する自由を推奨している。

また、髪色についても、「私し人様のすゝめによりまして赤毛染毛いたしました」[28]と、これ以前の時代では美しいとされた黒髪ではなく、自ら赤毛に染色する読者もいた。このように、髪型だけでなく、髪色も伝統を強く維持することはなくなっていった。

近代的職業は、自己の意思で就くこと、自由意志による転業や廃業、公私の明確な区別があることが基本的な条件であった（村上 1983）。近代的職業に就く職業婦人の増加は、生活を多様化させ、さまざまな扱いやすい髪型を必要とした。このような読者の生活様式の変化が、髪型の記事数の大幅な増加へと反映されているのではないかと考えられる。身体は文化とともに変化し、集団的規範によって形成される（コルバン 2010）。これらの流行は、結果的に洗髪がしやすく、衛生的で、経済的な束髪・洋髪の普及をうながし、頭皮・頭髪の疾患をさらに減少させたきっかけになったものと思われる。

Ⅳ．結論

明治後期に発刊された『婦人世界』に掲載された頭髪に関する読者相談の内容を検証し、明治後期から昭和初期にかけて読者が頭髪に対して、どのように悩んでいたのか、変遷を検証し、考察した。

明治末から大正初めの第 1 期（1906－1915 年）では、「頭皮・頭髪の疾患」がもっとも多かった。この時代は女性には日本髪が美しい髪型として推奨されており、水道等のインフラストラクチャーが十分に普及していないという状況もあいまって、女性は頻繁に洗髪をすることができなかった。それがこのような

---

[27] 『婦人世界』第 24 巻 5 号 p. 340　1929（昭和 4）年
[28] 『婦人世界』第 25 巻 2 号 p. 348　1930（昭和 5）年

相談が多くなった理由と考えられる。

大正末までの第 2 期（1916－1925 年）は、依然として「頭皮・頭髪の疾患」に関する相談がもっとも多かったものの、「髪型」についての相談件数が増加した点が注目される。職業婦人が増加したことにより、束髪や洋髪といった新たな髪型を選択しようとする女性が増えたことが、その背景として考えられる。だが依然として日本髪を結う女性も多く、それに伴う「頭皮・頭髪の疾患」についての悩みもなくなったわけではなかった。

昭和初期の第 3 期（1926－1933 年）では、「頭皮・頭髪の疾患」についての相談は依然として多いものの、「髪型」についての相談内容は大きく変化し、パーマやウェーヴなどの洋髪に関するものが多くなった。この時代には洗髪に用いられていた洗浄剤が饂飩粉などから石鹸・シャンプーパウダーへ変化する一方で、職業婦人の数はさらに増加し、束髪・洋髪にする女性も増えて行った。女性の生活慣習を変え、定型的な髪型から選択肢が増えたことで、審美性に着眼され、頭髪に関する相談内容の変化にも反映したのではないかと思われる。

『婦人世界』本誌の読者向けに書かれた記事には、流行などが書かれており、頭皮・頭髪の悩みについて掲載されることはなかった（横山 2018）。それに対して、読者相談には、フケやかゆみ、虱などに悩み、それでも美しい髪でありたいと願う当時の女性読者の姿を見ることができた。資本主義が発展し、女性が就くことのできる職業数が増加し、それらへの就業率の増加とともに職業婦人の間では、簡潔な手入れで良い洋髪が増え始め、日本髪を結う機会が低下した。加えて、関東大震災後には、婦人にも動きやすく簡便で質素な束髪や洋髪が推奨された。その背景には、第一次世界大戦が戦争景気を日本にもたらし、経済は急速に発展していき、女性の職業は拡大し、経済的自立が進んだことによって、活動量が大幅に変化したことが影響していると推察される。活動量の変化によって、髪型は変化し、インフラストラクチャーの整備が進んだことと合わせ、髪に対する清潔習慣も少しずつ変化した。しかし、洋髪を取入れ、週 1 回に洗髪が増加しても、新たな悩みが出現し、庶民の髪に対する悩みは尽きることはなかった。

引用文献

アラン・コルバン，2010,『身体の歴史Ⅱ　19 世紀　フランス革命から第一次世界大戦まで』，監訳;小倉孝誠，藤原書店.

平松隆円，2012,『黒髪と美女の日本史』水曜社.

宝月理恵，2010,『近代日本における衛生の展開と需要』東信堂.

石田あゆう，2016,『図説 戦時下の化粧品広告〈1931-1943〉』創元社.

木村涼子，2010,『＜主婦＞の誕生　婦人雑誌と女性たちの近代』吉川弘文館.

見田宗介，1980,『現代日本の精神構造』弘文堂.

永嶺重敏，1997,『雑誌と読者の近代』日本エディタースクール出版部，p. 181.

中嶌邦，1990,「近代日本における婦人衛生の位相－『婦人衛生雑誌』の背景－」『近代婦人雑誌目次総覧Ⅰ期』5，1-12.

村上信彦，1983,『大正期の職業婦人』ドメス出版.

週刊朝日編，1988,『値段史年表：明治・大正・昭和』朝日新聞社.

高橋準，1992,「新中間層の再生産戦略―1910 年代・20 年代日本におけるその『自己との関係』」『社会学評論』43（4）：376-389.

山崎康夫，1959,『日本雑誌物語』，アジア出版社，p. 51.

横山友子，2016,「黒髪と清潔 ： 明治中期～大正にかけての婦人衛生雑誌から読み解く黒髪の変遷」『人間社会学研究集録』11：101-124.

横山友子，2018,「婦人世界における頭髪記事分析―『婦人世界』から読み解く黒髪の変遷」『人間社会学研究集録』13：171-194.

養老猛，2010,『日本人の身体観の歴史』，法蔵館.

Historical change in hair cleanliness in Japan－an analysis of readers' questions and answers in a monthly magazine.

Tomoko Yokoyama

This study investigated questions and answers with readers about “hair” in “Fujin sekai,” a magazine published from 1906 to 1933. Questions were posted by the readers and beauticians or their teacher answered. Extracted questions were categorized and analyzed each 10-year.

Questions about hair were posted 191, First period had 108 of questions, and second period had 91, and then third period had 76. The categories were “disease of hair and head skin”, “caring of hair”, “hair type”, “hair style”, “hair accessory”, “aesthetic of hair”. In the first decade, the most common question was about “caring of hair”. Subsequently, there was “hair type”, the third was “disease of hair and head skin”. However, despite the gradual increase in questions on “hair style”, the question for “disease of hair and head skin” gradually disappeared.

Readers concerned about how to keep their hair clean, black, and beautiful. They also wanted to construct style in such a way to display the traditional and aesthetic beauty of Japanese women. However, domestic production of soap began, infrastructure was improved, elementary education spread, literacy rate increased, and the economy developed with women having jobs, and all these factors contributed to changing the standard of female beauty from the traditional style to individual preference. The shampoo custom changed with it, and cleanliness became entrenched.